

細い線にかなり太い線を組み合わせさせてこんなバランスのとれたものが出来ている。この人の先生は光悦ですが、それでもう一遍光悦も併せて見直してみるというわけで、角倉のものを通じて光悦のものを、そう感じた時に見てみる。それからちよっと細い線を使ってみる工夫して、人にも、細い線を生かしてごらんさないなんていうでしょう？私があの人に得たヒントなんです。フレッシュにするとかしないとかいうことは、やはりそれをやろうとする人間の眼だということ、ある時そういうものを書き出して、展覧会に出したとする。それに限って今までに書いたものより見てくれる。目新しいものを感じて、それを見た人が、また何か感じてくれて、みんながそういうものを書き出したとなると、それがその時分における一つのモダンな線だということになる。まあそんなことはめつたにありませんけれども、あればそうなるわけです。

そういうふうにして、誰かが書いたものの中で、非常に大きな懷抱、この線をこれだけ広げて行くという事、書法上ぎりぎりの限界というところまで広げたものなどあります。あるいはその反対に、こうまで求心的に引き絞ってしまつて思うところに、求心の極地が遠心につながるみたいなもので、そこでひとつの味を作る。現代の書家の中で、そういうことで、最も人がハツと思うようなものをやり出す人は手島右卿さんなのですが、その周りにいる人が、それに肉など付けて肥満体のようなものになって、手島さんはさぞ困るだろうと思うのですが、手島さんは冴えたものを出している。だから魅力があるし、われわれなどが見過ごしているものを、この人はこの一字をもって、これだけやって見せられる。非常に感嘆するのですが、その反対に非常におつとりしたものもある。そのおつとりしたもの造形を、もう一度迫力あるもので表現し直してみようという書家もある。

思いがけないものが非常に迫力のある線で、つまり、時間の短縮です。書いている時間の取縮したものの中から、またひとつ別の輝きを出すわけです。線が弾力を持ち始めるんです。線というのは、時間をかけると弾力を失いやすいものです。そのかわり浸潤して安定性ができるけれども、弾力というのは早さが必要なんです。弾力を持たせると、そこから一種いいような迫力を人間に打ちつけてくる。そういう弾力を与えてくる人もあるわけです。本当はそういう書家になる筈の人だったのが、どこかで技巧専門になつて、精神的にそういう弾力でなく書いてしまつた人もあります。大か家で名前をいってはいないが、どつちかという豊道先生は書が速い人です。ですからご覧なさい。書の線に絶えず弾力がある。けれども弾力というものは、一種の沈んだものとのコントラストの中で美しくなるわけでどこかで非常に静かな線があつて、弾力が出てくると、それが対照の中で美しくなるのです。

あの方は弾力ばかりだった。そのうちに、どつちかといえば造形性のほうに目が行くので、弾力に精神性がなくなつてしまつた。非常に静かなように見えるのですが、呼吸感というもので見る方法もあるわけです。今の書の中で値打ちがある書というのは、弾力であるとか、形とか、いろんなものを並べてみましたが、現代の書の中でひとつの方向というものは、呼吸感ということで、既往かれこれ四千年にもなりましようか、大変長い時間をかけて、これだけ呼吸感を考えて書いている時代はなかつたんじゃないでしょうか。その呼吸感が、実に美しいものを築くという事です。呼吸感というのは、弾力も沈潜もみな含めて呼吸感でできるということです。むかし人はそれをほとんど気づいてないと思うのです。こういう言葉でいうようなニュアンスではね。

(つづく)